

3割バッター

奨励	川上 信【かわかみ・しん】
奨励者紹介	日本キリスト教団八日市教会牧師 八日市めぐみ保育園園長

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者におしになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかに、だれもいません。」それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ。言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

（ルカによる福音書 10章17―24節）

こんにちへ。

今日は久しぶりにこの京田辺キャンパスのチャペル・アワーでお話をさせてもらえるということでしたので、喜んでここへ来させていただきます。

平和について考えてみる

先日7月21日は、個人的ことを言わせてもらおうと私の46回目の誕生日でした。誕生日を迎えるときというのは自分の人生を振り返り、また将来を見据えてさまざまなことに思いを馳せるものですが、いみじくも、その日がこの国の国政を左右する参議院議員選挙の投票日でもありました。結果は与党である自民党の圧勝という結果に終わりましたが、選挙の争点としては、衆参のねじれを解消して改革を進めていくということが声高に言われていました。その一つとして、この国の憲法を改正していくべきか、また護っていくべきかということも議論されていました。私たちの国の憲法は第九条をもつことから平和憲法と言われています。そのため第二次世界大戦後、戦争を放棄する規定をもつこの憲法の下、私たちは良くも悪くも戦争をしないという選択をしてきていたのですが、ここにきて、国際事情の緊張の高まりからか、自らの国を守るためには、平和憲法と言われる憲法さえも改正していくという議論が本格的に成されている、そんな時代になりつつあります。私たちの国が、そして未来の子どもたちにどのような国を作っていくかという観点からももう一度しっかり、「平和」というものの定義を調べておこうと思い、ウィキペディアで「平和」について検索をすると、平和（へいわ）とは、『一般には社会の状態が戦争や内乱、騒擾（そうじょう）などで乱れていないこと。現実的には国家の抑止力が内外の脅威を抑止している状態のこと』と書かれていたのです。つまり史的には戦間期（英語ではinterwarとも表現）、戦争終結から次の戦争開始までの時間を意味すると記されていたのです。これを見ていて変な違和感を感じました。「えっ、ちょっと待て、これじゃ元々前提になる世の中は戦いありきの世界で、つまり世の中が平和であるってことは通常の状態ではないってことになるよな」と思ったのです。確かに世界の歴史や日本の歴史を見ていると、人と人は争いの連続であり、どの戦いが何年に起こり、どの戦争の勝者がどちらでどこがどこを支配するようになったかということが歴史の学問における根底にあるようにも思います。つまり強い者が、弱い者を力で支配して、世の中は成り立っているというのが人間の築いてきてしまっている歴史観であり、「平和を保つには、軍事力が必要なんだ」的な考えまでがウィキペディアでは書かれていました。ウィキペディアというのは、たしかにオープンコンテンツの百科事典なので、方針に賛同している者なら、誰でも好きに記事を編集したり新しく作成したりできます。自分に見識がある者だという自負さえあれば、誰でも自由に書き込むことのできる辞書です。なので誰かが偏った考えで書き込めば、こうした書き方になるのかなとも思ったのですが、何千万人という人が利用している辞書が「力において対等じゃないのが当たり前」というのが前提となって、人間の世の中を見ているのはなんだか異様で寂しい感じがしました。でも力というのは決して武器を使う軍事力だけではなく、お金の力である経済力もれっきとした力です。

視点を変えて見てみたら

そこで問題です。今私が着ているこの服はいくらするのでしょうか。ちょっと質問を変えます。あなたならこの服をいくらで買いますか。

ユニクロなどが出てきてから、服の値段は安くなる一方で、僕が自分で服を買うようになったときよりも今の時代の方が、良い物が安く手に入っているようになっていますが。

正解ですがこの服は、2万6000円します。え～なんでそんな高いのと思うでしょう。でもそれには理由があります。この服の素材は実は紙でできています。「紙布」というものですが、和紙をすいたことがありますか。紙は木を原料とするパルプという繊維からできていますが、この服の糸は麻や絹ではなく、紙を作るパルプからできています。その糸は機械で作ることができず、人が時間をかけて紡がなくてはならないので、今の日本では、芸術作品としての作家はいますが、商業的には割に合わないで作られなくなってしまっています。しかし、経済的に厳しいネパールの人にその製法を伝授して作ってもらって、その働きに見合う代金をしっかり払うフェアトレードという取り組みで、日本で作ったならこれぐらいという値段で売って、その利益を経済的に厳しい国に返していくという活動を通して売られているために、こんな値段になるのです。そうした意味を知って、もう一度見たら2万6000円という値段も、（決して見目ではなくて、）この紙布という布きれを一着の服分紡ぐのに1カ月ぐらいかかるということを知って、その上でこの服の値段を考えたならば、買うか買わないかは別にしてそれぐらいはしてもおかしくないと納得できる値段に感じられてきませんか。

イエスが喜んだ

弟子たちの宣教活動

さきほど読んでもらった聖書の箇所は、有名な「善きサマリヤ人」の譬え話に先立って描かれている箇所で、イエスが72人の弟子を神様のことを知らせる宣教活動に派遣され、その成果をもって弟子たちが帰ってきたときのことが描かれている場面です。そのときに派遣前から帰った弟子たちがイエスから力を与えられて「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」と報告しています。そんな宣教の旅の報告をする72人の弟子たちをイエスは大変喜んで迎えたという場面が描かれた箇所なのですが、そんななかでイエスが語っているのは「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者におしになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」ということですよ。ここである「これらのこと」とは、ルカによる福音書の文脈から読み取ると、弟子たちの「宣教の成果」ということになると思います。弟子たちが帰ってきて、それぞれにめざましい宣教の成果をイエスに報告し、それを神は「知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者におしになりました。」とイエスは言うのです。そして弟子たちが経験してきたことは、「多くの預言者や王たちが見たかったが見ることができず、聞きたかったが聞けずにいたことだ。」と言うのです。それなのに、そのような体験ができた弟子たちを「幼子のような者」と言っています。イエスはしばしばその発言のなかで、幼子や子どもを引き合いに出して取り上げることがあります。「わたしの名のためにこの子どもを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」などはその代表的なものです。子どもと一口に言っても、日本語においては「乳飲み子」、「幼子」、「子ども」、「少年少女」とさまざまな言い方がありますが、聖書が書かれているギリシャ語において「幼子」の表現方法はたくさんあります。そして今日の聖書箇所で用いられているのは、子どもを表す言葉のなかでは比較的使用頻度の少ない「ネーピオス」という言葉が使われています。この「ネーピオス」という語は「まだ物の言えない子ども、幼児、子ども、無学な者、未熟者」という意味です。この語の語源をたどると、「ネー」は否定の「ない」を表す語で、「ピオス」は「エボス＝言葉」と言う語が変化したもので、つまり「ネーピオス」とは「言葉がない」という意味からできてきた言葉だということが分かります。このことを踏まえてイエスの語っている言葉をいまい度聞いていくと「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者におしになりました。」「つまり神の御心に叶った宣教のめざましい成果は、知恵ある者や賢い者ではなく、また預言者や王のように威厳や力ある者ではなく、神はそれらのない幼子のような者、無学な者、言葉をもたぬ者におしになったとイエスは言っているということになります。つまり弟子たちによる宣教は、巧みな言葉、思慮に富む言葉、専門性の高い言葉による宣教では決してなく、むしろ無学な言葉なき者による宣教だとイエスが表現するような稚拙で、決して巧みではない泥臭い活動だったのかもしれない。イエスは72人の弟子たちを派遣するにあたっては、今日の聖書箇所の少し前の箇所で「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。その家に泊まると、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。」（ルカによる福音書10章5―7節）と言われた後に、平和のあいさつに始まり、隔てなく食卓を囲み、そして病人がいれば癒す。実際のところ、派遣された弟子たちによる宣教の業もまた、それは巧みな言葉によるものではなかったのです。ただひと言「平和がこの家にあるように」つまり「シャローム」というあいさつの言葉だけだったのです。幼子でも発せられる行い。いちいちご託を並べ、えらうなことを言い聞かす。つまり知恵や力といったものに頼らない活動こそがイエスが言う神様のことを知らせる宣教の活動だということです。

失敗を受け入れられる

余裕こそ

私は、一応大学も大学院も出ていますが、決してどの場面でも優秀な方ではなくて、いつも落ちこぼれ寸前の成績で過ごしてきました。今となってはとてとてもためになっている体験というのは、自分の人生の成功事例よりも、失敗してきたことの方です。その苦境をどう乗り越えてきたかの方が、自分の宝となる経験になっていることが多いように思います。常に100%の成功を求めるよりも、3割ぐらいの成功を求めていく方が自分に余裕も作ってくれるし、片意地を張って必ず成功しなくてはならないという思いに捕らわれずにすむ。そし

て、変なストレスを感じなくていいので、その方がよいように思うのです。でも、100%から見ると、30%は決して高い確率ではないので、だめなような気になってしまうのですが、野球の世界に置き換えて考えてみてください。実は10回バッターボックスに立ち、3回はヒットを打つ3割バッターは、すごい選手だと評価されるのです。あの世界的な選手のイチローでさえ今までで年間打率4割を超したことはないのですから、その3割を目指す。自分のことを分かってくれる人が、10人中3人いればすごいこと。それならなんとかやるような心の余裕ができるのではないのでしょうか。人は余裕がなくなるとイライラしたりギクシャクしてしまいます。忙しく大変なときには、他人を許し、他人を受け入れる優しさをもてなくなるものです。だから自分の都合の良いことを通すために力を使ったり、自分の利益を優先してしまうのです。それは自分に余裕がなくなっている、そんな生活の積み重ねから生まれてくる感情のような気がします。

だからこそ、心は常に10割バッターではなく、3割バッターを目指していく。10回中、7回の失敗も許せる自分であったなら、周りの人たちに対しても、自分ばかりを主張しなくても生きていける。そんな自分を作っていくことができるのだと私は思っています。

心に余裕や優しさをもてたときに、その場に生まれてくるものが平和なのだとしたら、自分の心持ち次第で平和は作っていけるものなのだと思うのです。自分を否定された、自分の居場所がない、自分は失敗できない、そんなことに悩まなくてすむ自分になることが自分の器を広げてくれることになるのだと思います。

どんな時代にあったとしても皆さんの上に、また心に平和が保たれますように願っています。

2013年7月24日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録